

海城発電

泉鏡花

青空文庫

「自分も実は白状をしやうと思つたです。」

と汚れ垢着あかつきたる制服を絡まとへる一名の赤十字社の看護員は静に左右を顧かえりみたり。

渠かれは清しんこく国の富豪柳りゆうし氏の家なる、奥まりたる一室に夥多あまたの人数んずに取囲まれつつ、椅子いすに懸りて卓つくえに向へり。

渠を囲みたるは皆軍夫ぐんぶなり。

その十数名の軍夫の中に一人逞たくましき漢おのこあり、屹きと彼の看護員に向ひをれり。これ百人長なり。海野うんのといふ。海野は年配ねんばい三十

八、九、骨太なる手足あくまで肥へて、身の丈もまた群を抜けり。

今看護員のいひ出だせる、その言を聴くと齊しく、

「何！ 白状をしようと思つたか。いや、實際味方の内情を、あの、敵に打明けやうとしたんか。君。」

いふ言ややあらかりき。

看護員は何気なく、

「左様です。撲つな、蹴るな、貴下酷いことをするぢやありませんか。三日も飯を喰はさないで眼も眩むであるものを、赤條々にして木の枝へ釣し上げてな、銃の台尻で以て撲るです。ま、どうでしやう。余り拷問が厳しいので、自分もつひ苦しくつて

堪りたまりませんから、すつかり白状をして、早くその苦痛を助りたいと思ひました。けれども、軍隊のことについては、何にも知つちやあるないので、赤十字の方ならばくわ悉しいから、病院のことなぞ、悉しくいつて聞かして遣やつたです。が、其そん様なことは役に立たない。軍隊の様子を白状しろつて、益々酷さいなく苛むです。実は苦しくつて堪らなかつたですけれども、知らないのが真ほんとう実だからいへません。で、とうとう聞かさないでしまひましたが、いや、実に弱つたです。困りましたな、どうも支那人の野蛮なのにやあ。何しろ、まるでもつて赤十字なるものの組織を解さないで、自分を何がなし、戦闘員おんなじと同おんなじ一に心得てるです。仕方がありませんな。」

とあだかも親友に対して身の上談話をなすが如く、渠は平氣に物語れり。

しかるに海野はこれを聞きて、不心服なる色ありき。

「ぢやあ何だな、知つてれば味方の内情を、残らず饒舌ツちまう処だつたな。」

看護員は軽く答へたり。

「いかにも。拷問が酷かつたです。」

百人長は憤然として、

「何だ、それでも生命があるでないか、譬ひ肉が爛れやうが、さ、皮が裂けやうがだ、呼吸があつたくらゐの拷問なら大抵知れたもんでないか。それに、苟も神州男児で、殊に戦地にある御互

だ。どんなことがあらうとも、いふまじきことを、何、撲なぐられた位で痛いといふて、味方の内情を白状しやうとする腰拔どこが何処どこにあるか。勿論、白状はしなかつたさ。白状はしなかつたに違ちがないが、自分で、知つてればいはうといふのが、既に我が同どう胞ぼうの心でない、敵に内通も同おんなじ一だ。」

といひつつ海野は一步を進めて、更に看護員を一いち睨ちげせり。
看護員は落着す濟すまして、

「いや、自分は何も敵に捕へられた時、軍隊の事情をいつては不可けぬ、拷ごう問もんを堅忍けんじんして、秘密を守れといふ、訓令を請うけた事もなく、それを誓ちかつた覚おぼえもないです。また全く左様そうでしやう、袖そでに赤十字の着いたものを、戦闘員と同おんなじ一取扱おんじをしやうとは、自分

はじめ、恐らく貴^{あなた}下方^{がた}にしても思^{おも}懸^{いがけ}はしないでせう。」

「戦地だい、べらぼうめ。何を！ 呑^{のん}気^きなことをいやがんでい。」

軍夫の一人つかつかと立^{たち}懸^かりぬ。百人長は応^{おう}揚^{よう}に左^{ひだり}手を広^{ひろ}げて遮^さりつづ、

「待て、ええ、屁^へでもない喧^{けん}嘩^かと違^{ちが}うぞ。裁判^{さいばん}だ。罪^{つみ}が極^{きま}つてから罰^{ばつ}することだ。騒^{さわ}ぐない。噪^{そう}々^{ぞう}しい。」

軍夫は黙^{もく}して退^{しりぞ}きぬ。ぶつぶつ口^{くち}小^こ言^{ごと}いひつづありし、他の多くの軍夫^{なり}らも、鳴^{なり}を留^{とど}めて静^{しず}まりぬ。されど尽^つく不^ふ穩^{えん}の色^{いろ}あり。眼光^{やうがん}鋭^{えい}く、意^い気^き激^{げき}しく、いづれも拳^{こぶし}に力^{ちから}を籠^こめつづ、知らず知らず肱^{ひじ}を張^ひりて、強^{つよ}ひて沈^{しん}静^{じやう}を装^まひたる、一室^{いつしつ}にこの人数^{にんすう}を容^{ゆる}れて、燈^{とう}火^かの光^ひ冷^{ひや}かに、殺^{ころ}気を籠^こめて風^{かぜ}寒^{さむ}く、満^{まん}州^{しゅう}の天^{てん}地^ち初^{しよ}夜^や過^あぎたり。

時に海野は面を正し、おもて警むるが如きいまし口氣くちぶり以て、

「おい、それでは済むまい。よしむば、われわれ同胞が、君に白状をしろといったからツて、日本人だ。むぎむぎしゃべ饒舌るといふ法はあるまいぢやないか、骨が砂利にならうとままよ。それをさうやすやすと、知つてれば白状したものをなんのツて、面と向つてわれわれにいはれた道理か。ぎりえ？ どうだ。いはれた義理ぎりではなからうでないか。」

看護員は身を斜ななめにして、椅子に片手を投懸けつつ、手にせる

鉛筆を弄もてあそびて、

「いや。しかし大きに左様そうかも知れません。」

と片頬かたほを見せて横を向きぬ。

海野は睜みはりたる眼まなこを以て、避けし看護員の面おもてを追ひたり。

「何だ、左様かも知れません？　これ、無責任の言語を吐いちやあ不可いかんぞ。」

またじりりと詰寄りぬ。看護員はやや俯うつむ向きつ。手なる鉛筆の尖さきを嘗なめて、筒服ズボンの膝ひざに落書らくがきしながら、

「無責任？　左様ですか。」

渠かれは少しも逆らはず、はた意に介させる状さまもなし。

百人長は大に急せきて、

「唯ただ（左様ですか）では済まん。様子に寄つてはこれ、きつとわれわれに心得がある。しつかり性根しょうねを据すへて返答せないか。」

「何様どんな心得があるのです。」

看護員は顔を上げて、屹きつと海野に眼を合せぬ。

「一体、自分が通行をしてをる処を、何か待まち伏ぶせでもなすつたやうでしたな。貴あなた下方大勢で、自分を担かつぐやうにして、此家ここへ引ひ込こむだはどういふわけです。」

海野は今この反問に張合を得たりけむ、肩を揺ゆりて気競きおひ懸おれり。

「うむ、聞きたいことがあるからだ。心得はある。心得はあるが、先まづ聞くことを聞いてからのこととしやう。」

「は、それでは何か誰ぞの吩咐いいつけ附つけでもあるのですか。」

海野は傲然ごうぜんとして、

「誰が人に頼まれるもんか。吾われの了簡りょうかんで吾が聞くんだ。」

看護員はそとその耳を傾けたり。

「ぢやあ貴下方ひとに、他を尋問する権利があるので？」

百人長は面おもてを赤うし、

「轉さえするない！」

と一声高く、頭がちに一呵いっかしつ。驚破すわといはば飛とび蒐かからむず、

氣勢きお激おしき軍夫らを一わたりずらりと見渡し、その眼を看護員に

睨ねめ返かえして、

「権利はないが、腕力じゃ！」

「え、腕力？」

看護員は犇々ひしひしとその身を擁ようせる浅黄あさぎの半被股引はつぴももひきの、雨風に色褪いろあせたる、譬たとへば囚徒の幽霊の如き、数個すかの物体を胸みまはして、秀ひいでたる眉まゆを顰ひそめつ。

「解りました。で、そのお聞きにならうといふのは？」

「知れてる！ 先刻さつきからいふ通りだ。何故なぜ、君には国家といふ觀念がないのか。痛いめを見るがっらいから、敵に白状をしやうと思ふ。その精神が解らない。（いや、左様かも知れませんが）なんぞ、無責任極まるでないか。そんなぬらくらじや了見しやうけんせんぞ、しつかりと返答しろ。」

咄々とつとつ迫る百人長は太しこみづえき仕込杖しこみづえを手にしたり。

「それでどういへば無責任にならないのです？」

「自分でその罪を償ふのだ。」

「それではどうして償ひまじやう。」

「敵状をいへ！ 敵状を。」

と海野は少し色いろとけ解とけてどかと身みおも重もげに椅子いすに凭よれり。

「聞けば、君が、不思議に敵陣から帰つて来て、係りの将校が、

君の捕虜になつてゐた間の経歴について、尋問があつた時、特に

敵情を語れといふ、命令があつたそうだが、どういふものか君は、

知らない、存じませんの一点張ひつぱりで押お通として、つまりそれなりで

済すむだといふが。え、君、二ふた月つきも敵陣あつちにゐて、敵兵の看護をし

たといふでないか。それで、懇こん篤とくで、親切で、大層奴らのため

に尽力をしたさうで、敵将が君を帰す時、感謝状を送つたさうだ。その位信任をされてをれば、種々いろいろ内幕も聞いたらう、また、ただ見たばかりでも大概は知れさうなもんだ。知つてていはいはないのはどういふ訳だ。あんま余り愛国心がないではないか。」

「いえ、全く、聞いたのは呻吟声うめぎこえばかりで、見たのは繙帯ほうたいばかりです。」

三

「何、繙帯と呻吟声、その他は見も聞きもしないんだ？
可加いかげ減んなことをいへ。」

海野は苛立いらだつ胸を押へて、務めて平和を保つに似たり。

看護員は實際その衷情ちゆうじようを語るなるべし、聊も飾気かさざりけなく、

「全く、知らないです。いつて利益になることなら、何秘かくすもの

ですか。また些少ちつとも秘さねばならない必要も見出さないです。」

百人長は訝いぶかし氣げに、

「して見ると、何か、全然まる無神経で、敵の事情を探らうとはしな

かつたな。」

「別に聞いて見やうとも思はないでした。」

と看護員は手をその額ひたいに加へたり。

海野は仕込杖ゆか以て床ゆかをつつき、足踏あしづみして口惜くちおしげに、

「無神経極まるじやあないか。敵情を探るためには斥候せつこうや、探た

偵^{んてい}が苦心に苦心を重ねてからに、命がけで目的を達しやうとして、十に八、九は失敗^{しくじ}るのだ。それに最も安全な、最も便利な地位にあつて、まるでうつちやつて、や、聞かうとも思はない。無、無神経極まるなあ。」

と吐息して慨然たり。看護員は頸^{うなじ}を撫^なでて打^{うち}傾^{かたむ}き、

「なるほど、左様でした。閑^{ひま}だとそんな処まで気が着いたんでしやうけれども、何しろ病傷兵の方にはばかり気を取られたので、ぬかつたです。些^{ちつと}少も準備が整はないで、手当が行届かないもんですから随分繁忙を極めたです。五分と休む間^{ひま}もない位で、夜の目も合はさないで尽力したです。けれども、器具も、薬品も不完全なので、満足に看護も出来ず、見殺にしたのが多いのですもの、

敵情を探るなんて、なかなかどうして其処々まで、手が廻るものですか。」

「といまだいひも果ざるに、

「何だ、何だ、何だ。」

海野は獅子吼をなして、突立ちぬ。

「そりや、何の話だ、誰に対する何奴の言だ。」

と囁着かむずる語勢なりき。

看護員は現在おのが身の如何に危険なる断崖の端に臨みつつ

あるかを、心着かざるものの如く、無心——否むしろ無邪氣——

の体にて、

「すべてこれが事実であるのです。」

「何だ、事実！　むむ、味方のためには眼も耳も吝おしむで、問はず、聞かず、敵のためには粉骨碎身ふんこつさいしんをして、夜の目も合はさない、呼吸いきもつかないで働いた、それが事実であるか！　いや、感心だ、恐れ入った。その位でなければ敵から感状を頂戴ちやうだいする訳にはゆかんな。道理もつともだ。」

　　といひ懸けて、夢見る如き対手の顔あいてを、海野はじつと瞻りみまもつつ、嘲あざみ笑ひて、声太く、

「うむ、得がたい豪傑だ。日本の名誉であらう。敵から感謝状を送られたのは、恐らく君を措おいて外にはあるまい。君も名誉と思ふであらうな。えらい！　実にえらい！　国の光だ。日本の花だ。われわれもあやかりたい。君、その大事の、いや、御秘蔵のもの

ではあらうが、どうぞ一番、その感謝状を拝ましてもらいたいな
。」

と口は和らかにものいへども、胸に満たる不快の念は、包むに
あまりて音に出でぬ。

看護員は異議もなく、

「確かありましたツけ、お待ちなさい。」

手にせる鉛筆を納るとともに、衣兜の裡をさぐりつつ、

「あ、ありました。」

と一通の書を取出して、

「なかなか字体がうまいです。」

無雑作に差出して、海野の手に渡しながら、

「裂いちやあ不可いけません。」

「いや、謹つつしむで、拜見する。」

海野はことさらに感謝状を推おしいただ戴ただき、書面を見る事久しかりしが、やがてさらさらと繰広げて、両手に高く差さしかぎ翳しつ。声を殺し、鳴なりを静め、片唾かたずを飲みて群むらりたる、多数の軍夫に掲げ示して、

「こいつを見い。貴様たちは何と思ふ、礼手紙だ。可いか、支那チャンチ人ヤンから礼をいつて寄越した文ふみだぞ。人間は正直だ。わけもなく天窓あたまを下げて、お辞儀をする者はない。殊ことに敵だ、われわれの敵たる支那人チャンチャンだ。支那人が礼をいつて捕虜とりこを帰して寄越したのは、よくよくのことだと思へ！」

いふことば半ばにして海野はまた感謝状を取直し、ぐるりと押廻うしろして後背なる一団の軍夫に示せし時、戸口に丈長たけたかき人物あり。頭巾ずきん黒く、外套がいとう黒く、面おもてを蔽おほひ、身軀からだを包みて、長靴なががを穿ちたるが、纒わすかこうべに頭を動かして、屹きつとその感謝状に眼を注ぎつ。濃こまやかなる一脈いちみやくの煙は渠かれの唇辺くちびるを籠こめて渦卷うずまきつつ葉卷はまきの薰高かおりかりけり。

四

百人長は向直むきなほりてその言ことばを続つけたり。

「何と思ふ。意気地もなく捕虜とりこになつて、生命いのちが惜おきに降参して、

味方のことはうつちやつてな、支那人チャンチャンの介抱かいほうをした。そのまた尽力といふものが、一通りならないのだ。この中にも書いてある、まるで何だ、親か、兄弟にでも対するやうに、恐ろしく親切を尽して遣つてな、それで生命を助かつて、阿容おめおめ々々と帰つて来て、剩あまつさへこの感状を戴いた。どうだ、えらいでないか貴様たちなら何とする？」

といまだいひもはてざるに、満堂たちま忽ち黙を破りて、哄どつと諸声もろごえをぞ立てたりける、喧轟けんこう名状すべからず。国賊逆徒、売国奴、殺せ、撲なぐれと、衆口一斉熱罵恫喝ねつぱどうかつを極めたる、思ひ思ひの叫声は、雑音意味もなき響となりて、騒然としてかまびすしく、あはや身の上ぞと見る眼危き、唯单みひとつ身なる看護員は、冷々然として

椅子に恚^よりつ。あたりを見たる眼^{まくぼり}配^りは、深夜時計の輾^{きし}る時、病室に患者を護りて、油断せざるに異^{こと}ならざりき。看護員に迫害を加ふべき軍夫らの意気は絶頂に達しながら、百人長の手を掉^ふりて頻^{しき}りに一同を鎮^{しず}むるにぞ、その命なきに前^{さき}だちて決して毒手を下さざるべく、予^{かねいまし}て警むる処^かやありけん、地踏^{じだんだふ} 踏^ふみてたけり立つをも、夥^{なかま}間同志が抑制^{こぶし}して、拳^{こぶし}を押へ、腕^{やく}を扼^{やく}して、野分^{のわけ}は無事に吹去りぬ。海野は感謝状を巻き戻し、卓^{ていぶる}子の上に押遣りて、「それでは返す。しかしこの感謝状のために、血のある奴らが如^あ彼^{んな}に騒^{さわ}ぐ。殺せの、撲れのと云ふ氣組^{きぐみ}だ。うむ、やつぱり取つて置くか。引裂^{ひっさ}いて踏むだらうだ。さうすりや些^{ちつと}少^とあ念^{ねん}ばらしにもなつて、いくらか彼奴^{あいつ}らが合^が点^{てん}しやう。さうでない、あれ

でも御国みくにのためには、生命いのちも惜まない徒てだから、どんなことをしやうも知れない。よく思案して請取るんだ、可いか。」

耳にしながら看護員は、事もなげに手に取りて、海野が言ことばの途切れざるに、敵より得たる感謝状は早くも衣兜かくしに納まりぬ。

「取つたな。」と叫びたる、海野の声の普通ただならざるに、看護員は怪む如く、

「不可いけないですか。」

「良心に問へ！」

「やましいことは些ちつと少ないです。」

いと潔はなくいひ放ちぬ。その面貌の無邪気なる、そのいふことの淡泊なる、要するに看護員は、他の誘惑に動かされて、胸中その

是非に迷ふが如き、さる心弱きものにはあらず、何らか固き信仰ありて、譬たとひその信仰の迷へるにもせよ、断々乎一種他の力の如く何ともしがたきものありて存せるならむ。

海野はその答を聞くごとに、呆あきれもし、怒りもし、苛いらだ立ちもしたりけるが、真しんこ個天真なる状さま見えて言を飾るとは思はれざるにぞ、これ実に白痴者なるかを疑ひつつ、一応試に愛国の何たるかを教え見むとや、少しく色を和げる、重きものいひの渋しぶりがちにも、

「やましいことがないでもあるまい。考へて見るが可いい。第一敵のために虜とりこにされるといふがあるか。抵抗してかなはなかつたら、何故切腹をしなかつた。いやしくも神州男児だ、腸はらわたを掴み出して、敵のしやツ面つらへたたきつけて遣やるべき処だ。それも可いい、時と場合

で捕はれないにも限らんが、撲なぐられて痛いからつて、平気で味方の内情を白状しやうとは、呆あきれ果た腰拔だ。其上それにまだ親切チャンに支那人の看護をしてな、高慢らしく尽力をした吹ふい聴ちようもないもんだ。のみならず、一旦恥辱を蒙こうむつて、われわれ同胞の面つらよごし汚しをしてゐながら、洒しあ亜あつくで帰つて来て、感状いただを頂ただきは何といふ心得だ。せめて土産みやげに敵情でも探つて来れば、まだ言い訳わけもあるんだが、刻苦こつくして探つても敵の用心が厳しくつて、残念ながら分わらなかつたといふならまだも恕じよすべきであるに、先に将校しやうに検けんべられた時も、前刻さつきおれ吾が聞いた時も、いひやうもあらうものを、敵情なんざ聞かうとも、見やうとも思はなかつたは、実に驚く。しかも敵兵の介抱が急がしいので、其様そんなことあ考へてる隙ひまもなかつ

たなんぞと、憶おく面めんもなくいふ如きに至つては言語同断ごんごどうだんといはざるを得ん。国賊だ、売国奴だ、疑つて見た日にやあ、敵に内通をして、我軍の探偵に來たのかも知れない、と言はれた處で仕方がないぞ。」

五

「さもなければ、あの野蛮な、残酷な敵がさうやすやす捕虜とりこを返す法はない。しかしそれには証拠がない、強しいて敵に内通をしたとはいはん、が、既に国民の国民たる精神のない奴を、そのままに見遁みがしては、我軍の元氣の消長に関するから、屹きつと改悟の

点を認むるか、さもなくば相当の制裁を加へなければならん。勿論軍律を犯したといふでもないから、将校方は何の沙汰さたをもせられなかつたのであらう。けれどもが、われわれ父母妻子をうつちやつて、御国みくにのために尽さうといふ愛国の志士が承知せん。この室にゐるものは、皆な君の所置ぶりに慊けんえん焉んたらざるものがあるから、将校方は黙許なされても、其様そのんな国賊は、屹きつと談じて、懲戒を加ゆるために、おのおの決する処があるぞ。可いか。その悪にくむべき感謝状を、かういつた上でも、裂いて棄てんか。やつぱり疚やましいことはないが、些少ちよつとも良心が咎とがめないか、それが聞きたいぬらくらの返事をしちやあ不可いぞ。」「

看護員は傾聴して、深くその言ことばを味ひつつ、默然として身動き

だもせず、良猶やためら予ものいひて言いはざりき。

こなたはしたり顔つけいに附入りぬ。

「屹きつと責任のある返答を、此室ここにみんなる皆に聞かしてもらはう。」

いひつつ左右みまわを眊みまわしたり。

軍夫の一人は叫いび出いだせり。「先生。」

渠かれらは親方といはざりき。海野は老壮士なればなり。

「先生、はやくしておくむなせえ。いざこざは面倒めんぼうでさ。」

「撲なぐつちまへ！」と呼よばるるものあり。

「隊長、おい、魂たましいを据すへて返答しろよ。へむ、どうするか見やあ

がれ。」

「腰拔め、口いきくが最後だぞ。」

と口々にまたひしめきつ。四、五名の足のばたばたと床ゆかいを踏鳴ふみならす音ぞ聞こえたる。

看護員は、海野がいゆる腕力の今ははやその身に加へらるべきを解したらむ。されども渠いささかは聊も心に疲やましきことなかりけむ、胸むねぐる苦しき氣振けぶりもなく、静に海野に打向うちむかひて、

「些少ちつとも良心に恥ぢないです。」
軽く答へて自若じじやくたりき。

「何、恥ぢない。」

といひ返して海野は眼まなこを睜みはりたり。

「もう一度、屹きつとやましい処はないか。」

看護員は微笑ほほえみながら、

「繰返すに及びません。」

その信仰や極めて確乎かつこたるものにてありしなり。海野は熱し詰めて拳こぶしを握りつ。容易たやすくはものも得いはで唯、唯、渠かれを睨にらまへ詰めぬ。

時に看護員は従しやうよう容、

「戦闘員とは違ひます、自分をお責めなさるんなら、赤十字社の看護員として、そしておはなしが願ひたいです。」

いひ懸けて片頬かたほえ笑みつ。

「敵の内情を探るには、たしか軍事探偵といふのがあるはずで、一体戦闘力のないものは敵に抵抗する力がないので、遁にげらるれば遁にげるんですが、行やり損なへばつかまるです。自分の職務上病

傷兵を救護するには、敵だの、味方だの、日本だの、清国しんこくだのといふ、左様さような名称も区別もないです。唯病傷兵ただのあるばかりで、その他には何にもないです。丁度ちやうど自分が捕虜とりこになつて、敵陣にゐました間に、幸ひ依頼をうけましたから、敵の病兵を預りました。出来得る限り尽力をして、好結果を得ませんと、赤十字の名な折おれになる。いや名折は構はないでもつまり職務の落度となるのです。しかしさつきもいひます通り、我軍と違つて実に可哀想だと思ひます。気の毒なくらゐる万事が不整頓で、とても手が届かないので、ややともすれば見殺しです。でもそれでは濟まないのです、大變に苦勞をして、やうやう赤十字の看護員といふ躰たいめん面だけは保つことが出来ました。感謝状は先づまそのしるしといつていいや

うなもので、これを国への土産みやげにすると、全国の社員は皆満足みんなに思ふです。既に自分の職務さへ、辛かろうじて務めたほどのものが、何の余裕があつて、敵情を探るなんて、探偵や、斥候の職分が兼ねられます。またよしんば兼ねることが出来るにしても、それは余計なお世話であるです。今貴下あなたにお談はなし申すことも、お検しらべになつて将校方にいつたことも、全くこれにちがひはないのでこのほかにいふことは知らないです。毀誉褒貶きよほうへんは仕方がない、逆賊でも国賊でも、それは何でもかまはないです。唯看護員でさへあれば可いい。しかし看護員たる躰面を失つたとしてもいふことなら、弁解も致しません、罪にも服します、責任も荷ふです。けれども愛国心がどうであるの、敵愾てきがいしん心がどうであるのと、左様さようなことには関

係しません。自分は赤十字の看護員です。」

と淀よどみなく陳のべたりける。看護員のその言語には、更に抑揚と頓挫とんざなかりき。

六

見る見る百人長は色激げきして、碎くだけよとばかり仕込杖を握り詰めしが、思ふこと乱麻胸らんまを衝つきて、反駁はんぱくの緒いとぐちを発見みし得ず、小鼻ひげと、髯ひげのみ動かして、しらせ返りて見えたりける。時に一人の軍夫あり、

「畜生すき、好きなことをいつてやがらあ。」

「おい、隊長、色男の隊長、どうだ。へむ、しらばくれはよしてくれ。その悪^{わるす}濟^すましが氣に喰はねえんだい。赤十字社とか看護員とかつて、べらんめい、漢語なんかつかいやあがつて、何でえ、躰^{てい}よく言^い抜けやうとしたつて駄^だ目^めだぜ。おいら^{みんな}皆な知てるぞ、間^ま抜^ぬめい。へむ畜生、支那^{チャン}の捕虜^{とりこ}になるやうぢやあとても日本で色の出来ねえ奴だ。唐^{とうじん}人の阿魔^{あま}なんぞに惚^ほれられやあがつて、この合^{あい}の子^こめ、手前^{てめえ}、何だとか、彼^かだとかいふけれどな、南^{なん}京^{きん}に惚^ほれられたもんだから、それで支那の介抱^{かいぼう}をしたり、鼻^{ひい}負^きをしたりして、内幕を知つててもいはねえんぢやあねえか。かう、お

こわだか
声高に叫びざま、

足^{あし}疾^{ばや}に進^{すす}みいで

出^でて、看護員^{かんごいん}の傍^{かたえ}に接し、

その面^{おもて}を覗^{のぞ}きつつ、

「おい、隊長、色男の隊長、どうだ。へむ、しらばくれはよして

くれ。その悪^{わるす}濟^すましが氣に喰はねえんだい。赤十字社とか看護員

とかつて、べらんめい、漢語なんかつかいやあがつて、何でえ、

躰^{てい}よく言^い抜けやうとしたつて駄^だ目^めだぜ。おいら^{みんな}皆な知てるぞ、

間^ま抜^ぬめい。へむ畜生、支那^{チャン}の捕虜^{とりこ}になるやうぢやあとても日本で

色の出来ねえ奴だ。唐^{とうじん}人の阿魔^{あま}なんぞに惚^ほれられやあがつて、

この合^{あい}の子^こめ、手前^{てめえ}、何だとか、彼^かだとかいふけれどな、南^{なん}京^{きん}

に惚^ほれられたもんだから、それで支那の介抱^{かいぼう}をしたり、鼻^{ひい}負^きをし

たりして、内幕を知つててもいはねえんぢやあねえか。かう、お

いらの口は浄玻璃じょうはりだぜ。おいらあしよつちう知つてるんだ。お
 いみんな皆聞かつし、初手しよてはな、支那人チャンチャンの金満ながれだまが流丸くらを啖くらつて路
 傍ちばたに僵たおれてゐたのを、中隊長様が可愛想だつてえんで、お手当
 をなすつてよ、此奴こいつにその家まで送らしてお遣やんなすつたのがは
 じまりだ。するとお前その支那人チャンを介抱して送り届けて帰りしな
 に、支那人の兵隊が押込おしこむだらう。面くらいやアがつてつかまる
 処ところをな、金満やっこの奴やつこさん恩儀を思つて、無性むしように難有ありがたがつてる処
 だから、きわどい処を押隠して、やうやう人目を忍しのびしたが、大
 勢押込おしこむでゐるもんだから、秘かくしきれねえでとうどう奥の奥の奥
 ウの処ところの、女むすめの部屋へ秘かくしたのよ。ね、隠ひそれて五日いつかばかり対向さしむか
 ひでゐるあひだに、何でもその女が惚ほれたんだ。無茶におツこち

たと思ひねえ。五日目に支那の兵が退ひいてく時つかめえられてし
 よびかれた。何でもその日のこつた。おいら五、六人で宿营地へ
 急ぐ途中、酷ひどく吹雪ふぶく日で眼も口もあかねへ雪中ぶつたおに打倒れの、
 半分埋うまつて、ひきつけてゐた婦人おんながあつたい。いつて見りや支
 那人ヤンの片割かたわれではあるけれど、婦人だから、ねえ、おい、構ふめ
 えと思つて焚火たきびであつたため遣ると活返いきけえつた李花むすめてえ女で、此
 奴いつがエテよ。別離わかれ苦ひとめに一目ひとめてえんで唯一たつむとり人駈出かけだしてさ、吹雪ふぶき僵だおれ
 になつたんだとよ。そりや後あとで分つたが、その時あ、おいらツち
 が負おぶつて家うちまで届けて遣つた。その因縁いんえんでおいらちよいちよい父お
 親やしの何とかてえ支那の家へ出入しゅつにゅうをするから、悉くわしいことを知つて
 るんだ。女はな、ものずきじやあねえか、この野郎やろうが恋しいとつ

て、それつきり床着とこづいてよ、どうだい、この頃じやもう湯も、水も通らねえツき。父親なんざ氣を揉もんで銃てつぽうきざ創すもまだすつかりよくならねえのに、此奴こいつの音信たよりを聞かうとつて、旅団本部へ日に参まんだ。だからもう皆みんながうすうす知つてるぜ。つい隊長様なんぞのお耳へ入つて、御存じだから、おい奴やつこさむ。お前お検しらべの時もそのお談話はなしをなすつたらう。ほんによ、お前がそんなえな腰拔たあ知らねえから、勿もつてえ体ねえ、隊長様までが、ああ、可哀想だ、その女の父親とか眼を懸けて遣つかはせとおつしやらあ、恐しい冥伽みょうがだぜ。お前そんなことも思はねえで、べんべんと支那兵チャンチャンの介かいほ抱うをして、お礼をもらつて、恥かしくもなく、のんこのしやあで、唯今帰つて来はどういふ了見だ。はじめに可哀想だと思つた

ほど、憎にくくてならねえ。支那チヤンの探偵いぬになるやうな奴は、大和魂やまとだましい

を知らねえ奴だ、大和魂を知らねえ奴あ日本人のなかまじやあね

えぞ、日本人のなかまでなけりや支那人チヤンも同おんなじ一だ。どてツ腹あ

蹴破けやぶつて、このわたを引ずり出して、嚙かみつ潰つぶして吐出すんだい!

「其処そこだ!」と海野は一喝いっかつして、はたと卓子ていぶるを一打ひとつちせり。

かかりし間他あいだの軍夫は、しばしば同情の意を表して、舌者ぜっしやの声

を打消すばかり、熱罵ねつばを極めて威嚇いかくしつ。

楚歌そか一身あつまに聚りて集合せる腕力の次第に迫るにもかかはらず眉び

宇一点うの懸念けねんなく、いと晴々はればれしき面色おももちにて、渠かれは春しゅん昼寂ちゆうせき

たる時、無聊むりように堪たえざるものの如く、片膝を片膝にその片膝を、

また片膝に、交かわる交る投懸けては、その都度つど靴音を立つるのみ。

胸中おのづから閑ある如し。

けだし赤十字社の元素たる、博愛のいかなるものなるかを信ずること、渠の如きにあらざるよりは、到底これ保ち得がたき度量ならずや。

「其^{そこ}処だ。」と今卓^{ていぶる}子を打てる百人長は大に決する処ありけむ、屹^{きつ}と看護員に立向ひて、

「無神経でも、おい、先刻^{さつき}からこの軍夫のいふたことは多少耳へ入つたらうな。どうだ、衆目の見る処、貴様は国体のいかむを解さない非義、劣等、怯^{きようど}奴である、国賊である、破廉恥、無気力の^{にんがい}人外である。皆^{みんな}が貴様を以て日本人たる資格のないものと断定したが、どうだ。それでも良心に恥ぢないか。」

「恥ぢないです。」と看護員は声に応じて答へたり。百人長は頷きぬ。

「可、改めていへ、名を聞かう。」

「名ですか、神崎愛三郎。」

七

「うむ、それでは神崎、現在ある、此処は一体何処だと思ふか。」
海野は太くあらたまりてさもものありげに問懸けたり。問はれて室内を眺しながら、

「左様、何処か見覚えてゐるやうな気持もするです。」

「うむ分るまい。それが分つてゐさへすりや、口広いことはいへないわけだ。」

顔に苔むしたる鬚を撫でつつ、立ちはだかりたる身の丈豊かに神崎を瞰下ろしたり。

「此処はな、柳が家だ。貴様に惚れてゐる李花の家だぞ。」

今経歴を語りたりし軍夫と眼と眼を見合はして二人はニタリと微笑めり。

神崎は夢の裡なる面色にてうつとりとその眼を睜りぬ。

「ぼんやりするな。柳が住居だ。女の家だぞ。聞くことがありや何処でも聞かれるが、故と此処ん処へ引張つて来たのには、何かわれわれに思ふ処がなければならぬ。その位なことは、いく

ら無神経な男でも分るだらう。家族は皆^{みんな}追出してしまつて、李花はわれわれの手の内のものだ。それだけ^{あらかじ}予め断つて置く、可^いか。さ、断つた上でも、やつぱり看護員は看護員で、看護員だけのことをさへすれば可^い、むしろ他^{ほか}のことはしない方が当^{あたりまえ}前だ。敵情を探るのは探偵の係で、戦^{たたか}にあたるものは戦闘員に限る、いふて見れば、敵愾^{てきが}心を起すのは常業のない閑^{ひまじん}人で、進^{すすん}で国家に尽すのは好事家^{ものずき}がすることだ。人は自分のすべきことをさへすれば可^い、われわれが貴様を責めるのも、勿論のこと、ひまだからだ、と煎^{せん}じ詰めた処さういふのだな。」

神崎は猶^た予^らはで、

「左様^{さよう}、自分は看護員です。」

この冷かなる答を得え百人長は決意の色あり。

「しつかり聞かう、職務外のことは、何にもせんか！」

「出来ないです。余裕があれば綿織糸めんざんしを造るです。」

応答はこれにて決せり。

百人長はいふこと尽きぬ。

海野は悲痛の声を挙げて、

「駄目だ。殺しても何にもならない。可よし、いま一ツの手段を取らう。権ごん！ 吉きち！ 熊くま！ 一件だ。」

声に応じて三名の壮佼わかもものは群を脱して、戸口に向へり。時に出口の板戸を背にして、木像の如く突立ちたるまま両手を衣兜かくしにぬくめつつ、身動きもせで煙草たばこをのみたる彼の真黒なる人物は、靴

音高く歩を転じて、渠かれらを室外いに出しやりたり。三人は走り行きぬ。走り行きたる三人みたりの軍夫は、二人左右より両手を取り、一人うしろ後より背を推おして、端麗たんれい多く世に類なき一個清国の婦人の年としわ少かなるを、荒けなく引立て来りて、海野の傍かたえに推据おしすへたる、李・花は病床にありしなる、同じ我家の内ながら、渠は深窓に養はれて、浮世の風は知らざる身の、爾しかくこの室に出でたるも恐らくその日が最はじめ初ならむ、長き病やまいに倂おも竄かれて、寝衣しんいの姿なよなく、簪かんざしの花も萎しほみたる流罪るざいの天女てんに憐あむべし。

「国賊！」

と呼懸かけつ。百人長は猿臂えんびを伸ばして美しき犠牲いけにえの、白うき頸なを搔か掴つかみ、その面おもてをば仰のけざまに神崎の顔に押向けぬ。

李花は猛獸に手を取られ、毒蛇に膚を絡はれて、恐怖の念も
 あらざるまで、遊魂半ば天に朝して、夢現の境にさまよひなが
 らも、神崎を一目見るより、やせたる頬をさとあかめつ。またた
 きもせで見詰めたりしが、俄に総の身を震はして、

「あ。」と一声血を絞れる、不意の叫声に驚きて、思はず軍夫が
 放てる手に、身を支えたる力を失して後居にはたと僵れたり。

看護員は我にもあらで衝とその椅子より座を立ちぬ。

百人長は毛脛をかかげて、李花の腹部を無手と踏まへ、ぢろり
 と此方を流眊に懸けたり。

「どうだ。これでも、これでも、職務外のことをせねばならない
 必要を感じんか。」

同時に軍夫の一団はばらばらと立懸りて、李花の手足をおしふ圧伏せぬ。

「国賊！ これでどうだ。」

海野はみづから手をお下ろして、李花が寝衣しんいの袴はかまの裾すそをびりりとっんざばかり裂けり。

八

時に彼のか黒衣こくい長身の人物は、ハタと煙管きせるを取落しつ、其方そなたを見向ける頭巾ずきんの裡うちに一双まなこの眼爛らん々たりき。

あはれ、看護員はいかにせしぞ。

おもて
 面の色は変へたれども、胸中無量の絶痛は、少しも挙動に露は
 さで、渠はなほよく静を保ち、徐ろにその筒服を払ひ、頭髪のや
 やのびて、白き額に垂れたるを、左手にやをら搔上げつつ、卓の
 上に差置きたる帽を片手に取ると斉しく、肅然と身を起して、
 「諸君。」

とばかり言ひすてつ。

海野と軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫と、軍夫の隙より、真白
 く細き手の指の、のびつ、屈みつ、洩れたるを、纔に一目見たる
 のみ。靴音軽く歩を移して、そのまま李花に辞し去りたり。かく
 て五分時を経たりし後は、失望したる愛国の志士と、及びその腕
 力と、皆疾く室を立去りて、暗澹たる孤燈の影に、李花のなきが

らぞ蒼あおかりける。この時までにも目を放たで直立したりし黒衣の人は、濶かつほ歩坐中に動ゆるぎ出いでて、燈火を仰ぎ李花・に俯ふして、嚴然として椅子に凭より、卓ていぶる子に片肱かたひじ附きて、眼光一閃いつせん鉛筆の尖さきを透すかし見つ。電信用紙にサラサラと、

月 日 海城かいじょう発

予は目撃せり。

日本軍の中には赤十字の義務を完まつして、敵より感謝状を送られたる国賊あり。しかれどもまた敵愾てきが心のために清国の病てきこく婦を捉とらへて、犯し辱はずかしめたる愛国の軍夫あり。委細はあとより。

じよん、べるとん

英国ロンドン府、アワリー、テレグラフ社編へん輯しゅう行

青空文庫情報

底本：「外科室・海城発電 他五篇」岩波文庫、岩波書店

1991（平成3）年9月17日第1刷発行

2000（平成12）年9月5日第18刷発行

底本の親本：「鏡花全集 別巻」岩波書店

1976（昭和50）年3月26日第1刷発行

初出：「太陽」第二巻第一号

1896（明治29）年1月

※本文中、「恁りつ」は「凭りつ」、「※[#「目+旬」、第3

水準1-88-80]」を「※[#「目+旬」、第4水準2-81-91]」の誤

りと思われませんが、底本の通りにしました。

※「読みにくい語、読み誤りやすい語には現代仮名づかいで振り仮名を付す。」との底本の編集方針にそい、ルビの拗促音は小書きしました。

入力：門田裕志

校正：鈴木厚司

2003年8月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海城発電

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>